

泌 尿 器 科 紀 要

第 10 巻 第 9 号

昭和 39 年 9 月

随 想

泌尿器科と労災疾患

関東労災病院 泌尿器科部長 近 藤 賢

労災病院とよばれる病院が全国各地に次々とつくられ、ベット数では日本における有数の系列病院になりつつある。これら労災病院のうち泌尿器科の設置されている病院は3割近くあり、更に増加する傾向にある。大学病院は別として、診療病院でこれだけ高率に泌尿器科を設置し、更に設置してゆこうという系列病院は珍らしい。

労災病院では労働災害により発生した疾患、すなわち労災疾患の治療が中心となる。労災疾患は数多くあるが、脊髄損傷はその重要なものの1つである。この脊髄損傷の十分な治療が泌尿器科を欠いては望みえないことがわが国でも次第に認められてきている。これが労災病院で泌尿器科が独立設置されてゆく大きな理由のようである。

労災病院における泌尿器科の重要性と必要性とが認められて泌尿器科が設置されてゆくということは望ましいことであるが、現状では泌尿器科として十分な活動が出来るような条件は必ずしも備えられてないことが多い。そこで各労災病院の泌尿器科部長があつまり、協力してかかる悪条件を打破してゆこうという努力が払われている。このような状況のもとで泌尿器科と労災疾患について全般的な考察を行つてみることは無意味でないと思う。

泌尿器科に関係する労災疾患には色々あるが、脊髄損傷に合併する尿路疾患、性腺及び性機能異常、更に職業性膀胱癌の3者は学問的にも臨床的にも重要なものと云えよう。これらは何れもわが国では未開拓の特殊な分野である。これらの治療や研究は労災病院の泌尿器科で行うべきものと思われ、それを大学病院で行うよりも幾多の好条件に恵まれている。そうしてかかる特殊な問題の研究から出発して一般的な問題の解明に到達することは学問というもの性格から考えて決して不可能でないと考えている。このような夢のもとに各課題について私見を述べてみたい。

脊損患者の尿路疾患として重要なのは脊損患者の全例に合併する排尿障害と尿路感染症であり、又その1部に合併する尿路結石症、膀胱尿管逆流及び進行性水腎症の腎萎縮である。これら尿路合併症は脊損患者の尿路管理上重要であると共に、その何れも泌尿器科一般の重要問題と密接なつながりをもっている。

例えば脊損患者の進行性水腎症の腎萎縮、膀胱尿管逆流及び排尿障害は腎、腎盂、尿管、膀胱及び尿道という全尿路の機能異常を意味している。かかる尿路の機能異常は従来比較的不重視され、器質的異常が重要視される傾向が強かった。しかし最近になつて尿路の機能異常が関心を集め、その研究が盛んになつてきている。脊損患者の尿路の機能障害は神経障害という特定の条件のもとにおきてくる。従つて尿路の機能異常が如何にして器質異常をひきおこしてくるか、機能異常における神経性要因と筋肉性要因が如何なる相関関係にあるかとい

うような基本的な問題について興味深い示唆を与えてくれる。このような見地にたつと脊損患者の尿路の機能障害の研究は現在のトピックテーマの1つに関係する重要なものと考えられる。

脊損患者の尿路感染症は慢性の経過をとり、その治療は極めて困難である。脊損患者の尿路感染症を数学における複素数の問題にたとえてみると、一般の尿路感染症は実数の問題のようなものである。実数は複素数の特殊型であり、複素数までの知識で実数の問題は解しうるが、実数までの知識では複素数の問題は解しえない。脊損患者の尿路感染症の治療においては感染症の発生機序における宿主寄生体関係の重要性を認めざるを得ないし、又感染菌の耐性獲得や主要感染菌の交代という抗菌剤療法の重要問題に関する考察を欠くことも出来ない。これだけの配慮のもとに脊損患者の尿路感染症の治療を行つておれば、一般の尿路感染症の治療は容易である。しかし逆に一般の尿路感染症の治療に関する従来の知識のみでは脊損患者の尿路感染症の治療は殆んど無効である。従つて脊損患者の尿路感染症は感染発症に関する、又抗菌剤療法に関する基本的事項の認識を新しくし、尿路感染症全般に関する概念を更正する点で大きな意味をもっている。

脊損患者の尿路結石症は長管骨が体重を長期にわたり支持しないという特殊な条件のもとで急激に発生し進展する。かかる脊損患者の尿路結石症は一般的な尿路結石症とはその発生機序で大きく相異している。しかし天文学的尿路結石症 *astronomic urolithiasis* と呼ばれている長期の宇宙旅行 *space travel* 時に発生すると考えられる尿路結石症と類似する点が多い様である。従つて泌尿器科領域で宇宙旅行に直接関係する疾患である尿路結石症の研究において脊損患者の尿路結石症の発生病理の研究は高い評価をうけるであろうと予想される。

脊損患者の性腺及び性機能の研究は神経性要因がこれらの機能に如何に関与するかを人体において検討するのに最も適している。性腺及び性機能は従来専ら内分泌学的に或は心理学的精神医学的に研究されてきた。神経性要因も無視されたわけではないが、人体に関しては図式的に理解される程度が多く、神経筋肉性機序を臨床的に明確にしようという努力は余り払われていない。かかる不備をおぎなうるのは脊損患者に関するこの方面の研究であろうと考えている。

職業性膀胱癌はわが国で確認されている唯一の職業性癌である。職業性膀胱癌の研究から β -naphthylamin に対する β -glucuronidase の意義が強調され、更に自然発生の膀胱癌の病理発生に tryptophan 代謝の異常が重要な意味をもつという説にまで発展してきている。この説の可否は別として職業性膀胱癌という特殊な問題の研究から一般的な膀胱癌の病因論にまで貢献した業績は否定しえない。わが国では職業性膀胱癌の問題には殆んど関心がよせられていないが、社会的にも癌の病理発生の究明という学問的な立場からも興味深い重要な問題である。職業性膀胱癌は名の示す如く職業性に発生する労災疾患であるから、労災病院の泌尿器科で研究すべき課題である。そうしてその研究を手がかりとして膀胱癌全般の病因論に、診断に又治療に貢献することも不可能ではないと思つている。

労災病院の泌尿器科に独特な研究課題と考えている脊損患者の尿路合併症、性腺・性機能異常及び職業性膀胱癌について夢を述べてみた。これら泌尿器科的労災疾患には泌尿器科の重要問題である炎症、結石、腫瘍、機能異常のすべてが含まれている。従つて労災病院の泌尿器科のもっている人員、設備の悪条件が改善され、全国の労災病院の泌尿器科が横の連絡を緊密に保ち、協力して泌尿器科的労災疾患の研究を行いうる様になれば、労災病院の泌尿器科は日本の、ひいては世界の泌尿器科学の水準を高めるのに何らかの役割りを果しうるのであると期待している。